

既習の学習内容を統合する状況設定事例演習から得られた 1年次看護学生の学び

吉岡睦世 久島 萌 窪川理英 中溝道子 溝口孝美 平尾眞智子

健康科学大学 看護学部 看護学科

First-year students' learning from the case study seminar in nursing

YOSHIOKA Mutsuyo, KUSHIMA Megumi, KUBOKAWA Rie,
NAKAMIZO Michiko, MIZOGUCHI Takami, HIRAO Machiko

要 旨

【目的】

1年次生が日常生活の援助技術の総まとめとして行なった既習の学習内容を統合する状況設定事例演習において、体験した学びを明らかにすることを目的とした。

【方法】

状況設定事例演習に参加したA大学看護学部学生1年次53名を対象に、学生各自が行なった看護援助を振り返り、今回の演習を通しての学びについて無記名の自由記述を依頼し、質的帰納的に分析した。

【結果】

156のデータを抽出し、21サブカテゴリーにまとめ、最終的に6カテゴリーを抽出した。カテゴリーは【技術を工夫すること】【対象理解】【コミュニケーション力】【患者への配慮】【観察力】【看護師のチームワーク】であった。

【考察】

学生は対象と向き合うことで【技術を工夫すること】や【対象理解】を踏まえた看護技術が大切だと学んでいるが、【コミュニケーション力】【患者への配慮】【観察力】【看護師のチームワーク】を学べた学生は少ない。よって、多くの学生がこれらの内容をうい対象への理解が深まるような教授内容や方法を工夫していく必要がある。

キーワード：学生の学び、状況設定事例演習、1年次看護学生

I. はじめに

現在の基礎看護技術では、根拠を持った技術を学修することに重点がおかれている。根拠を持った看護技術を提供するには、人を理解する心理学やコミュニケーションなどの教養科目、解剖生理学や疾患などの専門基礎科目の知識がベースになると難しい。A大学のカリキュラムは、基礎看護技術の授業が教養科目や専門基礎科目と同時に4月から開講されている。そのため学生は、入学直

後より看護専門科目である基礎看護学から学ぶ。基礎看護技術においては、療養上の世話に関する日常生活の援助技術（A大学では「看護援助方法論I」と表記。以下看護援助方法論Iと表す）を学修している。このことから、学生は根拠を持った基礎看護技術を習得しづらい状況にある。また、A大学に入学する学生は、入学直前に生物や化学などの教養科目を学んでいた学生ばかりではなく、高校でそれら教養科目を履修していない学生

や、しばらく学ぶことから離れていた社会人も入学している。こういった学生達はカリキュラム上、ベースとなる知識の積み上げがないなか、看護援助方法論Ⅰの授業に入らなければならない。学生達は、根拠を持った基礎看護技術を習得したくともしづらい状況であると考えられる。

1, 2年次の看護学生の特徴として安ヶ平らは、病棟や患者をイメージできない、知識を関連づけたり活かすことができない、などと報告している¹⁾。A大学1年次の学生がこの科目を開講している時期に患者と出会う機会は、5月中旬に行なわれる体験実習しかない。このように学生達は患者をイメージできにくく、入学して間もなく看護の専門的な知識がないなか、この看護援助方法論Ⅰの演習に臨まなければならない。また安ヶ平らは、自分で目標を立てられず主体的な学習態度に欠ける、考えるプロセスより正解を求めるとも報告している¹⁾。以上の状況から、1年次の学生は、看護援助方法論Ⅰにおいて患者をイメージしにくく、また看護の専門的な知識も乏しいと考えられる。そのため前半の単元では、一つ一つの基本技術の手技や手順を習得することが優先され、患者の状況に応じて援助方法を考えるというところにまで考えが至りにくいと推測された。

このようなことから、看護援助方法論Ⅰの最終単元で状況設定事例演習を取り入れ、学生が既習の学習内容を統合し、主体的に看護援助の計画や実施が考えられるよう授業を組み立てた。この単元のねらいは、看護援助方法論Ⅰの総まとめであり、各単元で学修してきた技術を1人の対象者に必要な援助が発生したときに、複数の技術を使いながら日常生活援助を行なっていくときの考え方や技術を確実に修得することにある。

先行研究では、日常生活の援助技術の技術習得方法について検討するという研究は多い²⁻⁵⁾。また状況設定事例演習に関する研究は、卒業前に行なう統合技術演習時の研究や診療の補助技術に関するものなど多数⁶⁻⁸⁾みられる。しかし、1年次における日常生活の援助技術の状況設定事例演習について検討されている研究は、本学紀要第14号に研究者らが発表した研究⁹⁾を含め多くはない^{10) 11)}。

そこで今回の研究では、日常生活の援助技術の総まとめとして行なった既習の学習内容を統合する状況設定事例演習において、前年とは視点の異なる質問を分析することで1年次生が体験した学びを明らかにし、今後の看護援助方法論Ⅰの授業に継続して役立てていきたいと考える。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、1年次生が日常生活の援助技術の総まとめとして行なった既習の学習内容を統合する状況設定事例演習において体験した学びを明らかにし、今後の授業に活かすことである。

Ⅲ. 授業の概要

状況設定事例演習の概要を表1に示す。

Ⅳ. 方法

1. 対象

状況設定事例演習に参加したA大学看護学部学生1年次53名に記入を依頼したA5サイズ1枚の記述用紙。

2. データの収集場所

データ収集場所はA大学看護学部講義室。

3. データ収集期間

データ収集日は2016年10月27日～28日。

4. データ収集方法

データの収集は状況設定事例演習終了後、学生各自が行なった看護援助を振り返り、今回の演習を通して学んだことを自由記述してもらった。問いは「実施する技術が『対象の生命力の消耗を最小になるようにする』ためには、どのようなことが大切と学びましたか」である。

5. 分析方法

この記述用紙に書かれた学生の文章を質的帰納的に分析した。学生が演習を通して「何を学んだか」を分析の視点とした。具体的には記述用紙に書かれた学生の文章を熟読し、“～学んだ” “～の必要がある” “～に気づいた” “～大切だと思った” “～だと考えた” など学生が学んだ内容に注目した。例えば「ねぎらいの言葉が必要だと考えた」「患者の自尊心を傷つけないよう、声掛けが大切だと

表1 状況設定事例演習の概要

ねらい	この単元は、看護援助方法論Iの総まとめであり、各単元で学習してきた技術を一人の対象者に必要な援助が発生した時に、複数の技術を使いながら看護になるように日常生活援助を行なっていく時の考え方と技術を確実に修得する。
学習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 提示された対象者の一場面における必要な援助技術として、どのような技術が必要か今までの学習を振り返り考えることができる。 2. 対象者の思いを推察し、必要な声かけができる。 3. 各援助技術の順番を考えることができる。 4. 対象の安全・安楽・自立を考えて確実に実施できる。 5. 実施した援助技術が看護になっていたか評価できる。
事前学習課題の内容と方法	<p><内容></p> <p>F. ナイチンゲール「看護とは対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整える」に照らして、どのように援助したら対象の生命力の消耗を最小にして、「あー、疲れずにさっぱりしたわ」と整えることができるか考える。</p> <p><方法></p> <p>以下の内容を考慮し、看護を考えるよう事前課題を提示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aさんを整えるのに、今まで学習した技術からどのような技術項目が必要か抽出する。 ・ どのような言葉かけをすればよいか、具体的に記述する。 ・ 援助の順番を押さえて、対象の安全・安楽・自立を考え、一つ一つの技術を確実に実施する方法・留意点を導き出す。 <p>事例を読み、看護とは何かを頭に置きながら、上記<内容>について、A4用紙（形式と枚数は自由）に考えをまとめる。</p>
事例の設定	Aさん75歳女性。会話は普通にできる。体力が衰えており排泄はベッド上で行なっている。ベッドには横シートが敷いてある。ある日、尿意をもよおしたが間に合わず失禁をしてしまい、下着・浴衣・横シートを汚染した。
演習の具体的展開	
講義 (0.5コマ)	<p>最初の単元の授業（看護技術総論）の振り返り</p> <p><内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 看護技術とは、看護実践において看護とは何かという看護観に基づき、それを具現化するための援助を行なう活動のことである。 ・ 看護技術には、目に見える技だけでなく、人との接し方・身のこなし方・道具の使い方・関わり方など全てに訓練された技術が要求される。 ・ 看護における技術には、科学的根拠によって裏付けられた知識と熟練によって獲得される。そのため、「なぜこうするのか」「果たしてこれが最良の技術なのか」と疑問を持つ姿勢が大切である。 ・ 看護観を反映させた技術にするためには、自分ではない他人（患者）が必要としていることを、その人がそのようにして欲しいように援助するために知的な関心・心のこもった人間的な関心・実践的・技術的な関心を寄せて相手を見つめる必要がある。
演習1回目 (1.5コマ)	<p>提示された事例に対し、グループ学習を行なう。10グループで1グループの人数は5～6名である。教員は6名入り、1教員1～2グループを担当する。教員は学生のグループワークを見守る姿勢をとる。グループワークが停滞している時には助言をする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 各自の事前学習内容を発表する。それらをもとにグループで話し合い、Aさんの援助計画の一つにまとめる。 <ol style="list-style-type: none"> ① Aさんを整えるのに、今まで学習した技術からどのような技術項目が必要か抽出する。 (例えば、シーツ交換など) ② 援助する際、どのような声かけをすればよいか話し合う。 ③ 援助は1人の看護師の行動として考える。 ④ 援助の順番をおさえて、対象の安全・安楽・自立を考え、一つ一つの技術を確実に実施する方法及び留意点を導き出す。 ⑤ 既習のフィジカルアセスメントの学びを活用し、対象を援助する際にどのようにみていけばよいか考える。 2) 話し合いだけでは具体的な援助計画のイメージがつかないグループは、実習室で援助計画を実施し、修正する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施した行動は「対象の生命力の消耗を最小にする」ように実施できたか評価する。 ・ 自分たちが考えたものが不十分だと思えば、グループワーク・実践を繰り返しより良い援助方法を導きだす。 3) 5グループに分かれ援助計画を口頭で発表する。グループでこだわった援助方法や留意点など他グループに伝えたい内容を発表する。 4) 他グループの発表を聞いて、参考になることがあれば自分達の援助計画の内容を加筆修正する。 5) 翌週は発表（援助計画の実演）をするため、それに向けての話し合いや練習を行なう。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 看護師役、患者役（学生、人形のどちらでもよい）、ナレーション役（援助計画の内容等を解説）を決めておく。役は途中で交代してもよい。グループ全員が何らかで関われるよう役割を決めておく。 ・ 援助計画の実演は、看護師が入室してから退室までとする。 ・ 約20分の実演時間に合わせて発表内容は援助計画の全てを行なわなくてもよい。自分達がこだわった内容は解説を加えながらゆっくり演じるなど工夫する。そのため実施時間を計っておく。
演習2回目 (翌週2コマ)	<ol style="list-style-type: none"> 1) 援助計画の実演をするため、話し合いや練習を行なう。 2) 発表：援助計画の実演を行なう。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 2グループでお互いの発表をみる。 ・ 発表グループは、解説を加えながら実施を披露する。 ・ 発表時間は、実演と他グループ・教員の質問や意見、感想の時間を含め1グループ25分。 3) 発表後、一つ一つの技術が確実に実践できているか、グループで導き出した援助計画の留意点・援助方法の評価・修正を行なう。

学んだ」などをデータとして抽出した。これらのデータの類似点と相違点を検討し、〈声かけの大切さ〉などサブカテゴリーに分類した。次にサブカテゴリー同士の類似点と相違点を検討し、カテゴリーにまとめた。

データを抽出する際には原則的に原文を引用するが、抽出したデータが意味を成さなくなった場合のみ、文章の前後関係を示す必要のある箇所を、意味を損なわないように補足した。例えば、「～が」「～に」などの助詞や、句読点の補足である。

データの解釈および分析の妥当性については、共同研究者（基礎看護学の専門家6名）で一旦作成した分類について、データ、記述内容に戻りカテゴリー内やカテゴリー間の比較、再分類を繰り返しながら検討、確認した。最終的に共同研究者全員の意見が一致するまで繰り返し分析を行なった。

6. 倫理的配慮

本研究は、健康科学大学の研究倫理委員会による承認を得ている（2016年承認番号第19号）。発表に関連して開示すべき利益相反はない。

研究者が所属する機関でデータ収集を行なうことから、対象者は研究協力を拒否することで学修上何らかの不利益を被るのではないかと懸念することが予測される。そのため研究協力の依頼は演習終了後に行ない、以下の内容を口頭と文書で説明したあと、記述用紙を配付し記述を依頼した。回収箱は研究者の視界の届かない場所に設置し、記述用紙の投函をもって同意が得られたとみなした。

- 1) 本研究の目的、方法、期待される結果
- 2) 研究の参加は自由意思であり、同意しなくても科目の成績に影響しないこと
- 3) データは番号をつけ匿名性を確保すること
- 4) データは研究以外に用いないこと
- 5) データは研究終了後に裁断の上破棄すること
- 6) 研究結果は学会等での発表および学会誌等に投稿すること

V. 結果

研究協力に同意が得られたのは、53名中51名（96.2%）であった。

分析対象となった51名の記述から、学生が得た学びとして156のデータを抽出し類似のデータをまとめ、21サブカテゴリーに分類、最終的に6カテゴリーにまとめた。これらカテゴリー、サブカテゴリーおよび代表的な記述を表2に示した。以下カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、代表的なデータを「 」で示し説明する。

1. 【技術を工夫すること】

このカテゴリーは103データ、11サブカテゴリーで構成された。

〈効率よく実施し、消耗を最小に〉では「必要のない体位変換は患者の負担だけでなく看護師にも負担がかかるので、体位変換の数を減らすことによって体力の消耗を最小にする」、〈露出を最小にした保温の大切さ〉では「寒さを感じるだけで体力を奪われてしまうと思うので、タオルケットをかけるなどして体温を保たせることも大切だと思った」、〈先を読み、手早く丁寧に〉では「一つ先のことを考えることで作業がスムーズに運ぶ」、〈環境調整の大切さ〉では「適切で快適な温度を保って行なうことも大切であると思う」、〈技術の練習の大切さ〉では「やるべき事を忘れる事や作業に手間取ってしまったはいけないので、演習の時間以外にも練習を重ねておく」、〈清潔援助の工夫〉では「生命力の消耗を最小かつ不快を与えない安楽な気分が大切なのだと思います、石けんを使わない陰部洗浄を行なう事にした」、〈計画を立て、優先順位を考える〉では「計画や準備をしっかりとすることで、実施することが明確になり順序よくできる」、〈物品の配置の工夫〉では「患者に負担がないよう物品を近くに置く」、〈安全・安楽の確保〉では「第一に患者の安全と安楽を考えて、効率よく援助していくことが重要」、〈ボディメカニクスを活用し負担減〉では「患者だけでなく自分が使う力を最小にする必要もお互いが力を消耗しないために必要。特にボディメカニクスは重要なものである」、〈根拠を理解・評価の大切さ〉では「なぜかをきちんと理解し、学習することをこ

表2 学生が大切だと学んだ「対象の生命力の消費を最小にする」看護

カテゴリー (6)	サブカテゴリー (21)	学生の学びの代表的な記述 (全データ数: 156)	
技術	効率がよく実施し、消費を最小に (34)	私が最も学んだことは、「不必要な体位変換はさせない」ことだ。体位変換は寝衣交換やその他様々な技術にも関わってくる重要なものだ。しかし、体位を変えるということは当然体力を消費する。それはすなわち患者の生命力を消費させるということだ。だからこそ体位変換は何度もやらせず、必要な回数だけをやり、できる限り患者の生命力を消費させないような看護をするべきだと私は考えた。(No.38)	
	露出を最小にした保温の大切さ (22)	患者の露出を最小限にとどめること。寒くなると、体温を保とうとエネルギーをたくさん使って熱をつくりだす。エネルギーを使うと、体力の消費につながってしまう。体力を使うということは生きるための力を使っていることにつながると思う。(No.4)	
	先を読み、手早く丁寧に (19)	看護師は手際よく時間をあまりかけずに援助する必要がある。援助の時間が長いと患者の体力を奪う可能性があると考えられる。常に先を読み次の行動に移せるようにするべき。また、体力の衰弱がみられる患者には、あまり負荷をかけずに援助しなければならない。(No.31)	
	環境調整の大切さ (6)	環境調整のところで寒くないか暑くないかを聞き、気温を適温にすることが大切だと学んだ。(No.35)	
	技術の練習の大切さ (5)	第一に患者の安全と安楽を考え、効率良く援助していくことが重要だと思った。しかし、安全・安楽・効率の良さを考慮した上で援助することは、今の私にはとても難しく、もっと練習や経験を積み重ねていくことが大切だと思った。(No.5)	
	技術を工夫すること	陰部洗浄は石けんを使ってきれいにするか、拭くことにするかを考えたが、「対象の生命力の消費を最小」とあったため、最小にできる、且つ不快を与えない安楽な気分が大切だと思い、石けんは使わない陰部洗浄を行なうことにした。(No.28)	
	清潔援助の工夫 (4)		
	計画を立て、優先順位を考える (4)	看護計画の大切さ、準備をしっかりとしていないことで余分に多くの作業を行なってしまったためだ。計画・準備をしっかりとして、やる事が明確になり、順序良くできると考えた。また目的によって、援助が優先かコミュニケーション重視か優先順位を考えることが大切なことだと思った。(No.12)	
	物品の配置の工夫 (3)	患者に負担がないよう、時間もできるだけ短い時間ですばやく援助していくことが大切であるため、物品を置くことや看護師自身も援助しやすいようにしていった。(No.48)	
	安全・安楽の確保 (2)	安全・安楽に配慮して援助していくことが大切だと学んだ。(No.48)	
対象理解	ボディメカニクスを活用し負担減 (2)	自分が使う力を最小にすることがお互いに力を消耗しないため必要である。特にボディメカニクスは重要なものである。(No.11)	
	根拠を理解・評価の大切さ (2)	私たちのグループは体温・プライバシーには特に気をつけた。綿毛布やバスタオルで体を外界に触れないようにしたり、カーテンを閉めたり、1度に2～3つのことを行ない生命力の消費を最小にした。しかし、その分体位変換をする回数が多くなってしまったように思った。このようにどこかが1つ大丈夫でどこかが少し改善した方が良いというのは、患者には非常に大切なことだと考える。もっと1つ1つの技術を患者の目線で考え、且つ時間を短くしていくことが大切だと思った。(No.9)	
	患者の力を活用 (12)	対象の持てる力を考慮して援助が行なえるように、観察等を行なっていくことである。側臥位にして、古い寝衣を内側にまとめ対象の身体の下に押し込んだりすることが大切だと感じた。(No.10)	
	患者の思いや気持ちを確認し、心の安定 (10)	患者が笑顔でいられるように、患者の体調を気遣うことがどれだけ大切かを学べた。まだまだ生命力の消費を大切にすることは何か、どんな看護技術にも大切でありながら、どの場面ですべてを必要とするのかを更に考え、常に患者の気持ちを考えながら看護していきたいと思った。(No.2) 心の安定が保たれていないと不安になってしまい、気疲れしてしまうため、心の安定を保つことが大切であると分かった。(No.21)	
	患者にとって何がベストか考える大切さ (5)	「何が患者にとってベストな状態か」を考えることである。患者をできるだけ動かしたくなくれば少ない動作で体温を維持すること、必要以上に時間をかけないこと等が必要になる。看護師の数も変わってくる。患者を「少し運動させたい」状況もあるだろうし、今回のように必要最少人数の看護師で行なったほうが良い事もあるため、一概に「生命力の消費を最小にする」ためにはこれである、とは言えないものだと感じた。時間・物品・人数等で患者にとってベストであるものが、生命力の消費を最小にするものだと思う。(No.45)	
	対象の視点で考え対象理解 (4)	対象者の視点から援助の方法を考えることで、さらによりよい方法が考えだせると感じた。(No.1)	
	コミュニケーション力	声かけの大切さ (7)	寝衣交換の時、腰紐をきつく締めてしまうと呼吸が苦しくなることがあるため、患者に適当かを確認しながら行なう。お湯の温度が適当かどうかを少しずつ確認して行なう。常に喋るのではなく、患者の顔色を観察しながら、その場に必要だったり気持ちを和ませる一言を話しかけることが大切。(No.47)
		対象理解のためのコミュニケーション (2)	当人になることはできないため、やったつもりで終わるのではなく、直接どのようにすれば楽か聞いてみたり、終わった後に次に活かせるようにコミュニケーションを取ることが大切なのではないかと思った。(No.30)
		気配り (5)	終わった後に水分を摂ることで気を落ち着けてもらうなど、体調に気を遣う必要がある。(No.32)
	患者への配慮	看護師の態度 (1)	私が一番大切だと考えたのは看護師の表情だと思った。看護師が一生懸命やっている姿や、笑顔で接してくれたら患者はそこから安心感を得ることができ、消費を少しでも小さくすることができるのではないかと思う。(No.25)
観察力	観察力 (5)	作業の途中で、患者の体調に変化がないか観察することが大切。(No.34)	
看護師のチームワーク	看護師のチームワーク (2)	チームワークが大切であるため、チームでの打ち合わせや準備・段取りの良さが患者の生命力に繋がると考える。(No.11)	

サブカテゴリー内の () はサブカテゴリーを構成するデータ数。学生の学びの代表的な記述内の () は学生の記述用紙にふった番号。

れからも意識し技術を身につけること」など、学生は看護援助を行なう際、援助技術をどのように工夫するかを述べていた。

2. 【対象理解】

このカテゴリーは31データ、4サブカテゴリーで構成された。

〈患者の力を活用〉では「患者に負担をかけず、自分でできることは行なってもらうことが大切だと思った」、〈患者の思いや気持ちを確認し、心の安定〉では「気持ちを楽しんであげることで気後れがなく、生命力を消耗しないで済むのではと考えた」、〈患者にとって何がベストか考える大切さ〉では「時間、物品、人数等で患者にとってベストであるものが生命力の消耗の最小であると思う」、〈対象の視点で考え対象理解〉では「対象者の視点から援助の方法を考えることで、さらによりよい方法が考え出せると感じた」など、学生は相手の立場に立って看護を考えるということを述べていた。

3. 【コミュニケーション力】

このカテゴリーは9データ、2サブカテゴリーで構成された。

〈声かけの大切さ〉では「対象の自尊心を傷つけてしまわないよう、声かけを工夫する」、〈患者理解のためのコミュニケーション〉では「当人になることはできないので、やったつもりで終わるのではなく、直接どのようにすれば楽か聞いてみたり、終わった後に次に活かせるようにコミュニケーションを取ることが大切なのではないかと思った」など、学生は看護援助時にコミュニケーションを図っていくことの大切さを述べていた。

4. 【患者への配慮】

このカテゴリーは、6データ、2サブカテゴリーで構成された。

〈気配り〉では「終わった後にお茶を持って気を落ち着けてもらうなど、体調に気を遣う必要がある」、〈看護師の態度〉では「看護師が一生懸命やっている姿や笑顔で接してくれたら、患者はそこから安心感を得ることができ、消耗を少しでも小さくすることができるのではないかと思う」など、学生は患者へ配慮することで患者の気持ちが

落ち着き間接的に体力の消耗を少しでも減らせていると述べていた。

5. 【観察力】

このカテゴリーは5データ、1サブカテゴリーで構成された。

〈観察力〉では「患者の少しの変化でも察することが大切」など、学生は患者をよく観ることで患者の変化も捉えられ、看護援助を変化することが大切だと述べていた。

6. 【看護師のチームワーク】

このカテゴリーは、2データ、1サブカテゴリーで構成された。

〈看護師のチームワーク〉では「チームワークが大切であるから、チームでの打ち合わせや準備、段取りの良さが患者の生命力にも繋がると考える」などと、学生は看護師のチームワークが間接的に患者の生命力を消耗させないことにつながっていると述べていた。

VI. 考察

1. 状況設定事例演習から得られた学び

【技術を工夫すること】が大切だと考えた学生が最も多かった。対象の生命力の消耗を最小にするためには技術の工夫が必要であると気づき、根拠・安全・観察・効率性等の内容が活かされていたと言える。適切な技術の工夫をしなければ対象の体力の消耗が大きくなることから、効率よく行ない、工夫することの大切さが考えられていた。

次に多かったのは【対象理解】である。対象を理解し、相手の立場に立とうとする姿勢がないと、真の看護に成り得ないということに気付けたと言える。しかしこれについては、データ数は【技術を工夫すること】の約1/4しかないことから、援助の工夫や配慮といった手法という看護者の視点で留まっている学生も多いということになる。看護援助方法論Ⅰの授業の早期から、患者へ言葉かけることや手の差し伸べ方が看護に影響することを意識した授業を行なっていくことが必要であった。そうすると最終単元の状況設定事例演習には、学生は相手の立場に立ちその人の思いを感じ取り、配慮する看護援助が実施できるのではな

いかと考えられる。一條らは1年次の状況設定後の振り返りで、看護技術を身につけるための自己の課題として、学生は学習課題を自己の看護行為だけでなく、看護の対象である患者の立場で考えていたと報告している¹¹⁾。そのことから、看護者の視点で留まっている多くの学生も、状況設定事例演習を行なうことにより、患者の立場に立った看護ができているというところまでは到達していないが、今後の自己の課題としては認識しているかもしれないと考えられる。よって、今後の自己の課題について授業の中で考える時間を設けると、もっと多くの学生が対象理解の重要性を認識できるようになるのではないかと考えられる。

〈対象の視点で考え対象理解〉すると述べていた学生は、患者役の学生の意見を患者への配慮として計画に取り入れることができ、患者の負担がどこにくるかも考えられていた。これまでの授業では、患者役の気持ちは体験できても看護計画に反映することができていなかった。しかし、今回の状況設定事例演習の授業では、自分達の看護援助を発表する機会を2度設け、看護援助を考える時間を長く取っており、今までの授業に比べ学生達に看護援助の洗練できる機会を設けていた。同様に患者役の学生も同じ事例の患者を長い時間体験できた。そのため、普段の演習よりも患者役の意見を多く取り入れ看護援助に反映させることができたと考えられる。しかし、データ数は少ないことから、このことも看護援助方法論Ⅰの授業の早期から、対象の視点で考え対象理解する重要性を強調していく必要があった。そうすれば、看護援助方法論Ⅰの早期の単元では無理でも状況設定事例演習時には、相手の立場に立ち対象に生じている現象を捉え、その上で対象に合った技術の工夫をするという思考過程を持った学生がもっと増えるのではないかと考えられる。

他には対象の生命力の消耗だけでなく、看護師の体力の消耗も考えた学生がいた。看護師も効率よく最小の体力で援助を行なうことで、両者にとって良いことが結果的に対象の生命力の消耗につながるということが考えられている。学生は、看護学概論や看護援助方法論Ⅰでもナイチンゲール

の看護について度々触れている。ナイチンゲールは、看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること—こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること、を意味すべきである¹²⁾と述べている。学生はこの内容を踏まえ今回の状況設定事例演習に取り組みしており、生命力の消耗を最小にするように援助するということが大切だという考えが定着していると考えられる。このことから、学生は既習の学習内容を用いながら状況設定事例演習に取り組みしていたと考えられる。

【看護師のチームワーク】について述べていた学生は、「チームワークが大切であるから、チームでの打ち合わせや準備、段取りの良さが患者の生命力にも繋がると考える。」とあるように、対象自身に直接援助する内容を考えるとき、その対象のこのみ考えるのではなく、その周りの人的環境を整えることにも着目し、チームワークや患者との連携に考えが至っている。その結果、体力の消耗を防ぐことに繋がっていることに考えが至っていると考えられる。学生は看護援助方法論Ⅰに先行し、1年次前期に看護学概論を学修しそこで人を対象に援助する看護には倫理が伴うことを学んでいる。また看護援助方法論Ⅰにおいても、各単元で倫理的配慮を踏まえ対象者に技術を提供するように学んでいる。これらのことから、学生の素地として援助を行なう際の倫理的思考があるのではと考えられる。安藤らは、倫理的行動力の高い組織の特徴は、患者に個別性のある看護を行なっていること、看護師が倫理的に行動するためには組織におけるチームワークの重要性について継続して学ぶことが重要であると報告している¹³⁾。以上のことから、学生は、看護実践を行なう際には倫理が同時に伴うという意識を根底に持っているのではないだろうか。そのため援助を考えるときに倫理にまで思いが至ったのではないかと考える。これについてもデータ数が少ないことから、看護技術には看護倫理が根底にあることを各単元で繰り返し教授していく必要がある。

事例については失禁の患者であり、本来なら失禁を予防する看護も考えられても良いと考えられる。学生は、個人による事前課題や演習時にグループ内で援助を検討していたとき、グループで作成したワークシート、他グループとの発表の際には、患者の水分摂取量の把握やナースコールを手元に置いておくなど、記録用紙や口頭には述べられていた。しかし、記述には挙がっていなかった。学生は予防する看護について、現象レベルでは捉えられているが、看護援助としてしっかり認識できていないことが考えられる。よって今後の教授内容で強調していく必要がある。今回の状況設定事例演習では、学生は寝衣交換とシーツ交換を同時に行なう、陰部洗浄は寝衣交換の前に行なうか後に行なうかなど、各単元で学修してきた技術を計画には挙げており考えることはできていた。しかし、〈技術の練習の大切さ〉で「安全・安楽・効率のよさを考慮した上で援助することは、今の自分にはとても難しく、もっと練習したり経験を積み重ねていくことが大切だと思った」とあるように、学生は技術を確実に修得するには至っていない。そのため、この単元のねらいである複数の技術を使いながら日常生活援助を行なっていくときの考え方と技術を確実に修得することのうち、考え方については達成できているが、技術を確実に修得するには至っていないと考えられる。看護援助方法論Ⅰ以降の看護技術演習においても、学生が経験を積み重ね技術が確実に修得できるよう教授内容や方法を検討していく必要がある。

2. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、初年度の状況設定事例演習に参加した学生の結果である。次年度以降学びのデータを蓄積し授業に反映していきたい。

Ⅶ. 結論

以上のことから、日常生活の援助技術の総まとめとして行なった既習学習内容を統合する状況設定事例演習において、1年次生が体験した学びは以下のことが明らかになった。

1. 学生は既習学習内容を想起し、対象と向き合うことで【技術を工夫すること】や【対象理解】

を踏まえた看護技術が大切だと学んでいた。

2. 学生が技術の工夫のみに重きを置かず、まずは相手の立場に立ち対象に生じている現象を捉え、その上で対象に合った技術の工夫ができるよう、対象理解の重要性を強調していく必要がある。

Ⅷ. 謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

Ⅸ. 引用参考文献

- 1) 安ヶ平伸枝, 菱沼典子, 大久保暢子, 他: 基礎看護学担当教員の捉える学生の特徴と教授学習方法の工夫, 聖路加看護学会誌, 14 (2), p.46-53, 2010.
- 2) 竹内貴子, 中島佳緒里, 前田節子, 他: 看護実践能力を育てるための日常生活援助技術演習の展開, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 9 (1), p.63-70, 2014.
- 3) 小林ミチ子, 西脇洋子, 岡村典子: 基礎看護技術演習過程の評価の検討—演習過程に対する学生と教員の認識の相違—, 新潟県立看護短期大学紀要, 6, p.13-25, 2000.
- 4) 菊池由紀子, 工藤由紀子, 杉山令子, 他: 車椅子移送におけるトイレでの排泄援助の演習場面における看護学生の危険認識と防止策, 日本看護学教育学会誌, 25 (3), p.47-55, 2016.
- 5) 山本智恵子, 吉田美穂, 田澤茉莉奈, 他: 基礎看護技術における食事援助に関する学生の学び, 新見公立大学紀要, 36, p.95-100, 2015.
- 6) 清水恵子, 萩原結花, 村松照美, 他: 看護実践能力向上を目指した卒業時看護技術演習の取り組み—「自己の課題シート」に見られた総合技術演習の修学状況—, 山梨県立大学看護学部紀要, 12, p.43-52, 2010.
- 7) 堀内輝子: 看護技術演習における主体的学習行動支援プログラムの検証—第2報 事例検討内容の演示と技術評価での学習到達度からの分析—, 研究紀要青葉, 4 (1), p.7-22, 2012.
- 8) 高田まり子, 堀内輝子, 安川仁子: 事例検討と学生の演示を組み合わせた演習の試み—1年次学生を対象にした点滴静脈内注射の技術演習—, 北日本看護学会誌, 10 (2), p.41-52, 2008.
- 9) 吉岡陸世, 窪川理英, 中溝道子, 他: 学生が日常生活援助技術の状況設定事例演習において得た学びのレポート分析, 健康科学大学紀要, 14, p.67-81, 2018.
- 10) 間瀬由記, 小山真理子, 水戸優子, 他: 臨場感のある学内看護演習プログラムの学生による評価, 神奈川県立保健福祉大学誌, 9 (1), p.61-69, 2012.

- 11) 一條明美, 神成陽子, 升田由美子: 看護技術学習のレディネス形成を目指した技術評価演習での学生の学び—1年次の状況設定課題終了後のレポート分析—, 旭川医科大学研究フォーラム, 13, p.11-18, 2012.
- 12) F.Nightingale: Notes on Nursing (初版), 1860, 湯槇ます他訳, 看護覚え書(改訳第6版), 現代社, p.15, 2000.
- 13) 安藤千智, 中西貴美子: 看護師の倫理的行動力が高い組織文化の特徴について, 三重県立看護大学紀要, 21, p.1-9, 2018.

(受付日 2018年10月1日)

(受理日 2018年12月25日)

Abstract

Objective: This study aimed to describe the learning experience from the case study seminar by first-year nursing students. This seminar integrates all areas of prior and concurrent course learning, implemented as overall summary of skills for daily support.

Methods: The participants of this study are 53 first-year nursing students who submitted the post-practicum reports. The anonymous reports are described in a free text style. Students answered to the question, “What did you learn throughout the course?”

Findings: As a result of the analysis, 156 pieces of data were extracted, generating 21 subcategories and six major categories. These six categories include ‘well thought-out skills,” “understanding the patient,” “communication skills,” “consideration for patients,” “observation skills,” and “nurses’ teamwork.”

Discussion: Many students mentioned “well thought-out skills” and “understanding the patient,” are critical for quality nursing care. However, a few focused on “communication skills,” “consideration for patients,” “observation skills,” and “nurses’ teamwork.” The study suggests that it is necessary to develop teaching content and methods so that students can deepen their understanding the patients using their knowledge and skills acquired from the course.

Keywords : student learning
case study seminar
first-year nursing students